在日コリアンをめぐる記憶と「郊外」
――地方都市郊外（ホームタウン）における日本人の「廃棄」された記憶から――

川端　浩平*

While Zainichi Korean ethnic communities are dismantling, today many young Zainichi Koreans grow up in the suburbs and enjoy their consuming life just like other young Japanese. This means that more and more Zainichi Koreans are living next to Japanese, and more Japanese have opportunities to encounter Zainichi Koreans in their everyday lives. However, these encounters are often untold, and therefore the range of links between the two is considered not to exist. In order to explain this mystery, this paper argues that the rich links between the two do not exist because majority Japanese "waste" their memories about Zainichi Koreans. However, this is not only the "wasting" of Zainichi Korean's memories but also of memories and identities of Japanese themselves. This paper critically explores how Japanese consume and waste memories of "Others", and illuminates links to nationalism and neo-liberal values. This critical analysis is based on fieldwork research of the Japanese employees at a small company in my hometown Okayama at which my friend from high-school works. In particular, it examines the personal memories about Zainichi Koreans of seven young employees who live in the suburbs of Okayama. Through delineating social and historical linkages between Japanese and Zainichi Koreans living in the suburbs of a regional city, it proposes that rather than lamenting the collapse of the community, we must pay attention to these linkages.

「物語はサーチライトやスポットライトに似ている。それは舞台の一部を明るくし、それ以外を闇に残すのである」[バウマン2007：29]。

*東京外国語大学多言語多文化教育研究センターフェロー

1．はじめに

岡山市の郊外に育った私には、在日コリアンの友人・知人がいなかった。しかしそれは、私の生活世界に在日コリアンがいなかったということではない。本論文で扱うデータは、2003年に行った博士課程における１年におよぶ私の「ホームタウン」である岡山でのフィールド調査[1]において得られたものだが、そこで私はかつての同級生に在日コリアンがいたことに気づいたし、私が足繁く通ったお気に入りのラーメン屋の経営者が在日コリアンであることに驚いたりもした。そして岡山には6,412人の朝鮮籍・韓国籍の特別永住者が生活している。フィールド調査を通じた新しい出会いは、私のこれまでの「ホームタウン」という想像上の時空間をめぐるイメージを変えていった。しかしそれら在日コリアンの存在は、それまで私の記憶に存在していなかったのだ。

戦争が終わり、60万近くの朝鮮半島出身者は、日本で生活することを選択することを余儀なくされた[朴2005：4]。そして、工業地帯・国鉄主要駅・被差別部落の周辺に集住し、エスニック・コミュニティが形成された。しかし、中心市街地の再開発と郊外化が繰り返されるなかで、多くの在日コリアンもまた日本人と同じように共同体から離れて生活するようになった。それは、在日コリアン共同体に対する差別やスティグマからの解放を意味したが、その結果、帰属感覚(sense of belonging) [2]は諸個人の「主体性」に任されるものとなったのである[川端2008]。私のインタビューした在日コリアンの若者たちの多くは、他の日本人の若者と同様に、郊外を生活の拠点とし、消費文化を享受するなかで育った。つまり、エスニック・コミュニティが縮小化するなかで、日本人と在日コリアンの混住化はますます進んでいるのである。また、90%以上の在日コリアンが日本人と結婚しているということを考えると、日本人と在日コリアンの関わりあいはますます深まっているはずなのである。

それでは、日本社会における在日コリアンに対する理解は深まったのであろうか。たしかに韓流ブームなどを通じて韓国の文化への肯定的なイメージは存在しているし、それには在日コリアンへの理解を深める契機がたくさんあるようにも思われる[林2005]。しかしそのいっぽうで、メディアや日常では北朝鮮や朝鮮総聯に対するバッシングが溢れている[和田・高崎2003：8-24、在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせを許さない若手弁護士の会2003、中野2007]。後述する、私が参与観察を行った岡山市内の上下水道設計コンサルタントである山陽コンサルタントの中小企業従業員たちもまた、職場において北朝鮮や金正日を嗤い、ナショナルな言説を消費していた[3]。もちろん、彼／彼女らがいつも北朝鮮や金正日に対してのネガティヴ・キャンペーンを行っているわけではない。また、彼／彼女らの嗤いとは、職場においてはス

トレスの解消であり、場の空気を改善するための潤滑油として職場の仲間という小集団への積極的な貢献であるとも受け止められている。そして、そのジョークに込められた悪意は相殺されることになってしまう。しかし、彼／彼女らが北朝鮮や金正日について嗤うとき、その嗤いを不快に感じるかもしれない在日コリアンの姿は想像されていないのである。つまり、在日コリアンの存在そのものが「剥奪」されているのである。そして、そのような嗤いは別に新しいものではなく、そして無垢なものでもないことは、いかに戦争においてメディアがステレオタイプ的な「人種偏見」よって、アメリカで戦争という日常が人びとによって受け入れられたのかを明らかにしたジョン・ダワーの『容赦なき戦争』[ダワー 2001]を読めば明らかであろう。

そのような職場での状況から、私は、彼／彼女らは在日コリアンの存在をあまり良く知らないのだろうと考えていた。しかしそれとは別に、地方都市の郊外で生活する彼／彼女らを個別に家庭訪問をした際に聞き取りをしたところ、私の予想を大きく裏切って、彼／彼女らは在日コリアンのことを知っていたし、確かに過去の記憶の中に存在していたのである。彼／彼女らが語る過去をめぐる物語のなかには在日コリアンは存在している。しかし、職場という公共の場所では、その記憶はどこかへ行ってしまう。なぜか職場での北朝鮮に対する物語においては、彼／彼女らの在日コリアンをめぐる記憶については語られないことが選択されるのである。それはちょうど、履歴書に自分をアピールするために都合の良い情報のみで美化するのとどこか似ている。都合の悪い情報や過去はまるでゴミのようなものなのである。例えば、職場で北朝鮮バッシングが職場でのストレスを緩和し、ムードを高めるために生じたときに、各々の在日コリアンをめぐる記憶を参照点として想像力を深めることによって反論し、水を差すというようなことは起きない。

そのような職場での現状を考えると、北朝鮮バッシングを支える嗤いとは、単純な悪口なのではなく、私たちの生活そのものを根底から支えている社会の価値観と繋がっているのではないか。ジグムント・バウマンは、ちょうど生産と消費が繰り返されるなかで処理できないものとして残るゴミのように、近代の政治・社会体制は秩序建設や経済の進歩のために役に立たなくなった人びとが「人間廃棄物」として存在することを想定して設計されていることを指摘している[バウマン2007：9]。私たちは、自分たちが生活する社会の秩序や経済の進歩のためには、「人間廃棄物」を許容しない価値観のなかで生活しているのである。例えば、魅力のある都市をつくるためには、景観を乱すホームレスは犯罪者のような扱いを受ける。もういっぽうで、ホームレスをはじめ、貧困を抱える人びとに対する社会的福祉は新自由主義的政策のなかで縮小するばかりである。このような社会的趨勢の下、私たちは必要とは見なされない自ら

の過去の記憶の一部を、まるでゴミやホームレスを扱うように「廃棄」しようとしているのではないだろうか。つまり、社会が役に立たない人間を廃棄物と見なすように設計されているように、諸個人にとって役に立たない記憶を廃棄物であると考えるような風潮があるのではないだろうか。しかし、私たちが「廃棄」しようとしているのは誰の記憶なのだろうか。それは「他者」をめぐる記憶であるが、それと同時に自分の記憶そのものではないだろうか。そのような記憶を「廃棄」することよって、「他者」のみならず自らを語る契機を奪われているのではないだろうか。以上のような問題意識を深めるために、地方都市郊外で生活する山陽コンサルタント株式会社の従業員(計17名)のうち7人に対して家庭訪問を行った際の、職場という日常では語られることのない「在日コリアンをめぐる記憶」に関するインタビュー調査を検討し、「廃棄」されたそれらの記憶に光を当てる。

この試みはまた、7人の従業員や彼／彼女らが語る在日コリアンが生活している舞台である地方都市の郊外、あるいは日本の郊外化について考えることでもある。郊外とは、近代における都市への人口過剰に対応して20世紀初頭にイギリスのロンドンとケンブリッジの中間に位置するレッチワースを嚆矢として発達した、都市でも伝統的共同体でもない場所である。しかし、地方都市である岡山で郊外といった場合には、大都市圏周辺にあるニュータウンや新興住宅街のように場所が人びとに認識されるほど大規模なものではない。私の対象者が生活している郊外には、地域の地主が田畑を宅地化したような場所に開発された7－8軒くらいの規模の建売住宅のようなものも含まれている。つまり、本稿で述べる郊外とは特定の場所を指すというよりも、郊外化した住環境全般を指す。もういっぽうで、郊外で生まれた文化が逆に都市の中心部へと広がっていることも指摘されている[東・北田2007：119-120]。そのように広義に郊外を捉えると、ほとんどの日本で生活している人びとは郊外化した環境のなかで生活しているといえるであろう。伝統的共同体とは異なって郊外は根無し草的な性格を持っている[若林2007：28-30]。それゆえに、人間同士の繋がりも希薄に感じられ、諸個人の来歴を語ることが難しい。その結果、共同体的な繋がりへの欲望が強まり、それが伝統回帰的なナショナリズム的な物語と結びつきやすいのかもしれない。しかし郊外とは、閉鎖的な共同体社会を超えた広がりと繋がりに溢れている場所でもある[4]。私たちは郊外化している日本社会において、無味乾燥としたベッドタウンとしての匿名的な郊外という側面のみに光を照らすのではなく、その舞台の闇に潜んでいる豊穣な歴史・社会的繋がりに批判的に介入し、いかに郊外という場所で人びとが歴史・社会的に「他者」と繋がっているのかということを確認するような想像力を持つこともできるのではないだろうか。そのような批判的な想像力を養い、人びとの繋がりを回復

するためには、豊穣な記憶の断片を「廃棄」するのではなく、いかに向き合うかが重要となってくる。

2．在日コリアンを消費する、棄てる

2-1.　水谷さんの場合

岡山市中心市街地から北へ5キロばかり離れた郊外の実家で生活している水谷祐樹さん(1974年生まれ)を家庭訪問した際に、プレイステーション2のサッカーゲームをやりながら、在日コリアンについての質問をしてみた。彼の通っていた中学校の学区内には、おそらく岡山では唯一となった昔ながらのバラックが集合した河川沿いのいわゆる「朝鮮部落」が存在している地域であり、同地域生活者はそのことを良く認識している。

聞き手「在日(コリアン)の人とか学校にいませんでしたか、中学校？」
水谷　「ふん？」
聞き手「中学校のとき在日朝鮮人・・・」
水谷　「ああ、いなかったいなかった」

まず、水谷さんの「いなかった」という認識は間違えている。先述したように、彼の学区内には「朝鮮部落」が存在しており、たくさんの在日コリアンが彼と同じ中学校に通っていた。よって、ここで水谷さんは、「在日コリアン」がいなかったと主張しているわけではなく、在日コリアンなど出会ったこともないし、考えた経験がないという程度の意思の表明をしているにすぎない。

しかし、いくら彼が無関心を装ってみても、彼の日常生活が在日コリアンと切り離されているわけではない。「パチンコ好き」であり、頻繁に通うと教えてくれたパチンコ屋は、在日コリアンによって経営されている。また、彼の部屋には福山雅治、スピッツ、大黒摩季、WANDS、サザン・オールスターズとポピュラーなミュージシャンのCDが並んでいるのだが、サザン以外は全てパチンコの景品として獲得したのだそうだ。彼は、余暇のギャンブルという消費を通じて、在日コリアンの歴史や社会に触れている。そのような彼の日常が在日コリアンと無関係であるとは決していえないだろう。彼自身が述べる「パチンコ好き」という帰属感覚も、在日コリアンの存在抜きには語りえないのである。

2-2.　谷崎さんの場合

岡山市中心市街地から西へ5キロばかり離れた郊外の二世帯住宅に、彼の両親、妻、一歳の長男と生活している谷崎良和さん(1966年生まれ)の自宅に家庭訪問したときのインタビューでも、水谷さんと似たような反応が見られた。

聞き手「興味おありですか、在日(コリアンに関する)問題とか？」
谷崎　「在日は興味ねえ」
聞き手「知り合いとかいました？」
谷崎　「いやー、おらんおらん」

岡山県総社市にある県立高校に通った際に、社会問題研究部に所属して被差別部落の問題に取り組んだ谷崎さんだが、在日コリアンに対する興味は無いという。職場では昼休みも耳栓をして単行本を読んでいる谷崎さんの読書量は、山陽コンサルタントのなかでは圧倒的に多い。彼の両親、妻、1歳の長男と一緒に暮らす二世帯住宅の二階の一室は、なかば谷崎さんの書庫になっている。本棚の前で「わい(私)にとっては神にちけえわなあ(近いよね)、大江健三郎」という谷崎さんは、大江健三郎の大ファンだそうである。私は、夥しい数の書籍のなかに在日コリアンの作家である梁石日[5]の『タクシードライバー日誌』と『夜に賭けて』を手にとり、谷崎さんに感想を求めた。

聞き手「これ面白かったですか？」
谷崎　「ああ、ヤンソギル？あーあ、ふんふん」
聞き手「あっ、この『タクシードライバー日誌』、これ借りれませんか？』
谷崎　「あっ、ええよ」
聞き手「この『夜を賭けて』も読んだことないんですけど」
谷崎　「知り合いやこー（などは)、みんな読みょんじゃねーん(読んでいるんじゃないの)」

在日コリアンに対する「興味はねえ」と私に返答しつつも、彼の本棚には在日コリアン作家の本が並んでいる。そしてまた楽しく読んだという。しかし彼は、上記の私の「在日問題に興味はあるか」との質問に対して、楽しく読んだ梁石日の本について語ることは無かった。水谷さんと同様に、日ごろ楽しく出会っている在日コリアン作家の作品の背景にある歴史やそこに描かれている在日コリアンについて興味を持つというよりも、自分の趣味における消費の快楽が優先されている。つまり、面白いからその

本を読んだのであって、在日コリアンであるということには強い興味は感じられていない。水谷さんと同様に、在日コリアンは消費の対象となっているが、使用済みになると捨てても良いものなのである。しかしそれは、在日コリアンの存在を「廃棄」しているのみではなく、谷崎さん自身を「廃棄」しているのである。なぜなら、日本の帝国主義と植民地支配や戦後の在日コリアンに対する差別といった歴史・社会的背景抜きには、梁石日の存在も作品も、さらには谷崎さんの快楽さえも存在しないからである。

3．同じ郊外で生活する在日コリアンの「廃棄」された記憶

日常生活における読書やギャンブルといった消費を通じて出会う在日コリアンとは異なり、山陽コンサルタントの従業員のなかには、かつての在日コリアンのコミュニティと隣接して住んだ経験があったり、現在も住んでいたりする者たちがいた。在日コリアンに対する認識をめぐり、彼／彼女らが他の従業員と異なるのは、消費を通じて在日コリアンの存在を知っているのではなく、経験として身体に刻み込んでいるということである。ただ、それは必ずしも、在日コリアンに対する豊饒な知識を醸成しているわけではない。それでも在日コリアンに対する質問を投げかけたときには、彼／彼女らの口から在日コリアンに対するイメージが、具体的な思い出とともに語られた。

3-1. 橋本さんの場合

職場では、拉致事件をめぐって北朝鮮をネタにして他の従業員の嗤いを誘うこともある橋本建一さん(1969年生まれ)は、倉敷市水島で生まれ、現在も両親とともに水島の郊外住宅に住み、車で40分近くかけて山陽コンサルタントへ通っている。倉敷市の水島は「全国的にも有数の在日同胞の集住地域、朝鮮語で言うトンネ(洞内…集落の意)として知られています」[崔1999：3]と水島在住の在日コリアンが語るように、倉敷市水島は、岡山における最大の在日コリアン・コミュニティである [倉敷市2000][6]。第二次世界大戦中の水島には、1943年9月に発足した三菱重工業水島航空機製作所やそれと隣接して米軍機による爆撃を回避するための疎開先として亀島山地下工場が建設され、朝鮮半島からの強制連行の受け入れ先となった。[朝鮮人強制連行真相調査団2001：173-192]また、戦後の混乱期には「水島一級」と云われた在日コリアンによるどぶろくの密造で知られていた。[東川町史編集委員会1986]

橋本さんの自宅は、現在の水島の在日コリアン・コミュニティの中心で総聯と民団の倉敷支部、岡山朝鮮初中級学校や岡山商銀、朝銀西信用組合などがある亀島、神田、

明神町、緑町から東へ1キロばかりのところにある。しかし、橋本さんには在日コリアンの知人がまったくいないそうだ。橋本さんによれば、彼の住んでいる場所は集住地区と学区が異なるために、同じ小学校や中学校には在日コリアンはいなかったのだという。たくさんのトラックが走る岡山最大の工業地帯である水島の道路をドライブして、亀島山地下工場跡地 [花房1992][7]を探そうと、在日コリアンが集住している地域へ向かっている途中での橋本さんとの会話。

聞き手「そうですか、こんなに近くに住んでいても、そんなに関わりあいないんですねえ」
橋本　「そうじゃなあ」
聞き手「なんか話に出てきたりしますか？例えば高校とか卒業した時とかに、あいつは在日だったんだよ、とか」
橋本　「ないなあ」
聞き手「ないですか？」
橋本　「ちょっとの違いなんじゃろうけど、うちとかはないなあ」
聞き手「ないですか」
橋本　「気がつかんだけかもしれん」

30年以上水島で生活している橋本さんだが、わずか車で5分と離れていない在日コリアンのコミュニティにある地域の存在を認識しているものの、実際に訪れることはほとんどなく、歴史的経緯に対する関心も薄い。しかしながら、私に対しては、在日コリアンに対する特別な偏見を表現するわけではない。北朝鮮を嗤う橋本さんは、自分の生活する場を取り巻いている在日コリアンに対して、これまでほとんど強い関心を持ったことは無かった。確かに、中学校・高校時代に本名で日本の学校に通っていた在日コリアンはほとんどいなかった。私がインタビューした40名以上の在日コリアンの若者のうち本名で通ったのは、中学校まで朝鮮学校に通った者と現在岡山市内県立高校に通う李美姫(1986年生まれ)だけであった。本名を名乗って学校や職場に通うことが許容されない日本社会では、在日コリアンに接していても気づかないことはそんなに不思議ではないのかもしれない。

しかしもういっぽうで、橋本さんと在日コリアンとの繋がりはあまりにもあるという事実が残る。学校、スーパー、レストラン、花火大会・・・列挙すれば際限のない場所で、橋本さんは在日コリアンに出会っている。ただそのような出会いに自覚的であることが、日本社会を支えている価値観が要請しているものではないため、橋本さ

んは知る必要がなかった。しかしながら、水島という街に存在する民族学校、パチンコ屋、焼肉屋、朝鮮の食料品店といった橋本さんを育んだ風景は、ポストコロニアルな歴史背景を抱えているのである。そういった意味で橋本さんが生活している水島は、映画『トゥルーマンショウ』[Weir1998]で、ジム・キャリーが演じる主人公トゥルーマン・バーバンクが映画ディレクター・クリストフに管理されて生活しているテレビセットのシーヘヴンと同じような顔の無い郊外なのである。実は捏造されている記憶を疑うことなく、同じ毎日の風景を疑うことがなかったトゥルーマンのように、自分自身について語る契機を奪われているのである。

3-2. 山内さんの場合

山内美紀さん(1970年生まれ)も生まれてから小学校の4年生までの10年間を水島で過ごした。父方の祖父が水島で印刷業を営んでいたため、彼女の父親も水島で育ったのだそうだ。彼女は2003年5月に結婚した。その相手というのが水島の会社に勤めているそうなのだが、通勤時間を犠牲にしても「寂しい」感じのする水島に住もうとは思わなかったそうだ。実際に水島は空洞化している。かつて彼女が通った水島小学校もピーク時には684人の生徒がいたが、現在では168人にまで減少している。水島小学校の校長はその原因を「市街地で家を新たに建てられない上、コンビナート企業の採用も以前ほどなく、若い世代が他地域に住み『空洞化』した」と述べている[『山陽新聞』2003年12月30日]。彼女のアルバムのなかの1970年代前半の水島の写真を観ながら彼女は言う。

山内　「前住んでいた町内というかほとんどが…の方々」
聞き手「知り合いとかいました？」
山内　「だから、私は分かんないです。分からないでしょ、なに、あなた朝鮮人？って友達にはならないから。でも、まあ多分、(小学校) 4年生のときに変わって(転校して)いったから、訊くまでもなく転校したんで、訊いたことはないけど、多分ほとんどはそうだったと思いますよ」

そして彼女は私に「在日朝鮮人」は、自らの本名を隠しているのでこちらから聞くこともできないし、誰が在日コリアンかを知る術がないのだと述べた。

山内　「まあ、理由があるんだとおもうけど、理由っていうのは、まあ人それぞれ、今言われたようにあると思う。でも私ももう、こっちに来てから、あの、

ほとんどむこうの友達とは連絡がなくて、だから、そういうの訊くことができない。身近にいないから。で例えば、朝鮮の人が友達になったとしても、そういうことを聞く間柄というのは、相当深くないと、初対面でどうして隠しているのなんて言ったら、なんか、失礼じゃないけど、なんていうのかなあ。訊いたらいけないことかな、みたいな」

それでも彼女は、「昔住んでる繋がり」があり、在日コリアンに対して他の日本人とくらべて関心があると思っているそうだ。

山内　「だからまあ、どっちかというと、まあ私、昔そういうところ住んでたから、普通の日本人よりは少しは興味があるほうじゃないかな。興味というか…気にする？…ほうじゃないかなと思うけど。でも、だからといって会う人に、みんなにあなたは日本人ですかって訊かないし」

彼女の場合、メディアを介して得られる在日コリアンをめぐる関心は、橋本さんにくらべて高いように思える。しかし、彼女の在日コリアンをめぐる記憶はすでに過去をめぐる想像力の周縁に追いやられている。現在の彼女の日常において在日コリアンはまったく関係ないことであると考えられているがゆえに、それほど有益な記憶とはされていない。そして、在日コリアンの歴史・社会性に関しての問題は、名前を隠している在日コリアンを特定することができないという現実的な問題へと置き換えられてしまう。彼女が様々な場所で出会ったはずの在日コリアンをめぐる記憶は顧みられることなく棄てられ、過去の自分を取り巻いていた人びとや風景に存在する繋がりは閉ざされている。いっぽうで、北朝鮮に対してはエキゾチックな眼差しが向けられる。

山内　「(北朝鮮へ)行ってみたいと思いますか？」
聞き手「まあ、僕は遊ぶところならどこでも」
山内　「でもなんか、行ったら帰ってこれなさそう」

在日コリアン・コミュニティの中心で幼少期を過ごし、在日コリアンに対する関心が普通の日本人よりもあると自負する彼女の「行ったら帰ってこれなさそう」という想像力は、北朝鮮に対する嗤いを支えている。もちろん彼女は、北朝鮮と在日コリアンはまったく別の人々ではないかと答えるかもしれない。しかし例えばメディア報道においては、国内で生活する在日コリアン組織である朝鮮総連や朝銀への銃撃事件と

北朝鮮から入港してくる脅威としての万景峰92は地方紙の同じ紙面で語られてしまう[『山陽新聞』2003年8月24日]。彼女の棄てた記憶のなかには、そのようなバッシングによって苦しむ人々への理解の資源となるものが埋もれたままになっている。そして彼女もまた、果てしなく広がる自らの過去の記憶を棄てることによって、自らを語る契機を奪われているのである。

3-3.　越中さんの場合

在日コリアン・コミュニティに隣接した地域に生活していながらも、まったくその存在に気づいていない場合もあった。越中和子さん(1965年生まれ)は、岡山市の中心市街地から数キロばかり南に広がる郊外の実家で両親と内縁の夫と暮らしている。そこは、岡山県南広域都市計画の西部第一地区に位置しており、戦後に区画整理された地域である。かつては、戦時中に宇野線と工業地帯である岡南地区を結ぶ側線として建設され、戦後になって利用された岡山臨港鉄道の始発駅が設置された交通の要所であったこともあり朝鮮部落が形成されたと思われる。かつてその朝鮮部落で生活していた在日コリアン2世の朴永三(1929年生まれ)によれば、たくさんの在日コリアンが養豚業などを営み生活をしていた。しかし現在では、「ほとんどが出て」生活している者は少ない。彼が1948年に香川県の瀬戸内海沖にある直島から終戦後両親と岡山に渡って移り住んだときには、24－25世帯くらいあったそうだ。しかし、1965年以後の区画整理事業や1984年に岡山臨港鉄道が廃線になったこともあり、かつての朝鮮部落の面影はまったく無く、朴永三が始めて彼の息子が引き継いだ焼肉屋があるのみである。またそこから東に1キロ弱行ったところには、1952年9月には1950年9月1日より強制閉鎖されていた朝鮮学校の仮校舎があり、1956年4月には東に700－800メートルの場所に岡山朝鮮初中級学校が建設された。

越中さんは、朝鮮部落からわずか500メートルばかり南にある実家で両親と姉と弟の5人家族で育った。彼女はちょうど区画整理事業の始まる2ヶ月前に生まれた。つまり、彼女の成長とともに、朝鮮部落は郊外の風景へと変化していった。彼女の自宅に家庭訪問した際に、このあたりには朝鮮部落があったことを知っているのか尋ねてみた。「全然知らない」と答えた彼女は、しばらくして急に何か閃いたかのように次のように切り出した。

越中　「わかった！新保じゃない、新保」
聞き手「新保？新保ってどの辺ですかねえ？」
越中　「新保っていうのはどのあたり…新保っていうのはなんか、なんだろう、当

新田のあたりとか市営住宅みたいのがあって、そのビルの市営住宅ではなくて、一軒家のぼろーい市営住宅が残っているところがあるんよ」

聞き手「どこですか？」

越中　「どこなんだろう。なんかでも、あそこはいっちゃ駄目だって言われたことがあるような気がするの」

自宅の周辺でチマチョゴリを着て朝鮮学校のバスで通う学生をみたことはあるが、それ以外はまったく在日コリアンの存在に気づくことは無かった。その彼女がもし朝鮮部落なるものがあるとしたらと過去の記憶を辿り出会ったのが、両親の「あそこにはいっちゃ駄目」と言われた場所である。彼女が朝鮮部落であると述べた場所は、おそらく被差別部落である。おそらくというのは、彼女の挙げた名前と被差別部落の市営住宅が存在する地域は隣接しているが、地名は異なるためである。

3-4. 松田さんの場合

石川県根上町出身の松田啓さん(1962年生まれ)は、彼が育った石川と引っ越した先の岡山で2回、合計15年間、隣の家に住んでいたのは在日コリアンだった。現在、妻と2人の子どもと暮らしている岡山市藤田に広がる郊外住宅にも、1974年6月末に岡山朝鮮初中級学校が移転してきて以来、在日コリアンの家族が生活している。かつて、彼が育った石川県根上町の実家の隣には、小学校の5-6年生頃まで機織業を営む在日コリアンの家族が住んでいた。

聞き手「知り合いとかいました？学校とかにいました？」

松田　「いやー、いないいない。近所、たまたま隣の人が朝鮮の人やったかなあ、石川県の」

聞き手「えっ、家が隣の人？」

松田　「そう。うちの家、石川県におった時、隣の人が朝鮮の人だった。朝鮮って言ったら言いかた悪いけど」

松田さんの母親は、「朝鮮漬」などの朝鮮料理の作り方を教わるなど在日コリアンとの交流があった。しかし、それでも田舎町であるから在日コリアンに対する差別はあったそうだ。

聞き手「そのときは(隣人が在日コリアンであること)知らなかったんですか？」

松田　「知らない、知らない。やっぱ田舎のほうじゃからなあ、やっぱ嫌がられるんよなあ、あっちの人や言うたら」

聞き手「はあ」

松田　「抵抗がある人は、やっぱ嫌がるんじゃろうかなあ、と思うよ。うちのお袋は、あんまそんな、まあ嫌がることはないけども、あのー、やっぱ、結婚相手とかそんなんじゃったら考えるわなあ。あんまりようねえなあゆーか(あまり良くないんじゃないのみたいな)。つきあいする程度とか、そういうのであれば、別になんともねえみたいじゃけどなあ(何ともないみたいだったけれどね)」

さらに松田さんと在日コリアンとの不思議な関係は続く。1980年代末のことで、3年から4年くらい岡山市南部の郊外に住んでいたときの隣人が在日コリアンだったそうだ。

松田　「岡山へ来てなあ、まあ転々となあ、まあ色々とちょんちょんと泊まったりするんだけど(色々なところで生活したけれど)、私が来て、その嫁さんと結婚するときには、須崎の隣の福富っていうところ、福富東っていうところにいたんだけど、その隣が、これまた朝鮮の人だった。焼肉屋やったから」

やはり、母親はここでも朝鮮料理を教えてもらい交流があったそうで、「また隣、朝鮮人やなあ。不思議やなあ」と言っていたそうだ。そして1997年に現在の岡山市藤田に引っ越してきた。このあたりに在日コリアンの知り合いはいるかどうか尋ねてみた。

松田　「そこんとかそうじゃなかったかなあ。「キンちゃん」とこの。名前はまあ違うけど。校長じゃったいうたかなあ？」

松田妻「うん」

聞き手「学校の？」

松田妻「そうそう」

松田　「朝鮮学校の校長かなんか言うとったで、そこの何軒かむこうの。うちの通り沿いの、今、名前変わったがあ(変わったんだけれどね)、居酒屋さんになって、居酒屋さんになってな。焼肉屋さんしてたけど、最近、居酒屋さんに」

聞き手「焼肉屋さんから居酒屋に・・・、(焼肉屋のころの)名前はなんていうんですか？」
松田　「焼肉屋いうか、肉を販売しとったんよ」
聞き手「はあー。肉屋？なんていう名前の？」
松田　「名前！？聞いたけど、わしも聞いたけど忘れたがあ(忘れたよ)」
松田妻「いつも前通るんだけど、入ったことないから分かんない」
聞き手「今は居酒屋ですか？」
松田　「知らんのや」
聞き手「どこにあるんですか？」
松田　「ここから何軒かむこう」
聞き手「何軒かむこう？」
松田　「煙草屋の自動販売機があるからすぐ分かるんじゃけど」
聞き手「苗字は？」
松田　「知らん」
聞き手「話したことはあるんですか？」
松田　「奥さんとは、前、肉屋さんときなあ、ちょこっと話した程度やなあ」

松田さんの家から100メートルくらい歩いた住宅街に「焼肉材料一式・キンちゃん」という看板がある。そしてその前にはタバコの自動販売機がある。外からの様子では、居酒屋をやっているのかどうか分からないが、松田さんとその妻の認識では、タバコの自動販売機と「キンちゃん」は、ある種の日常的な風景の一部として同等に語られているように思われる。その在日コリアンの経営する「キンちゃん」の背景にある歴史・社会的な広がりについては、特に関心を抱いているわけではない。それは在日コリアンに限ったことではないのかもしれない。日常的風景には歴史があるのだということさえ関心が払われていない。日常的風景においては、その場所が持つ歴史性よりもむしろ、タバコの自動販売機のように消費者として関わりが深い記号のアピールの方が強いのだろう。

４．棄てられた「友人」の記憶

4-1.　真田の場合

山陽コンサルタントの従業員のなかで、親しい在日コリアンの友人がいたのは真田昭(1975年生まれ)だった。彼は、私の高校時代の同級生であり親しい友人でもある。私と同じように岡山市郊外で育ち、インタビュー当時は両親と同居していた。彼は高

校3年生の4月のある日の放課後、同級生で父親が在日コリアンで母親が日本人を両親に持つダブルの高村浩に出自を告げられた。しかし、彼にとって高村は在日コリアンではなくて「友人」であると受け止められている。例えば私が彼に最初にインタビューした際のことである。

真田　「まあ、在日は結構いるなあっていう。一番最初にすげーおるなー（たくさんいるなあ）と思ったのは、高校の時にバイトした時かな」
聞き手「どこでバイトしたの？」
真田　「倉敷の水島で」
聞き手「バイトしてたっけ？」
真田　「水道の調査行っとった（調査に行っていた）」
聞き手「あーあー、水島ね、うんうん」
真田　「水道の調査行ったときには、韓国人街が、もちろん朝鮮学校があって、韓国人街があって、おばあさんとかが片言だし、庭先は必ずアロエと唐辛子が植えてあるんよ。で、貧富の差がすごいあるっていう。すげーでかい家はでかいし、貧乏なとこは、なに、長屋みたいなところ」
聞き手「へー、そんなのがある？」
真田　「おばあさんとか、そういう所は年寄りが一人で住んでいる」

以上のような真田の水島の在日コリアン・コミュニティとの出会いの思い出には、エキゾチックな眼差しと、初めて在日コリアンに出会った衝撃が入り混じっていることが分かる。しかし、在日コリアンの住民がなぜそこに存在するのかという歴史・社会的な背景は語られることは無い。もういっぽうで、彼が直接に知っている在日コリアンは、「友人」として認識されている。

聞き手「その前には知り合いはいなかったわけ？」
真田　「高校のとき？は、だからまあ、最初は分からんかったけど、じゃけえ、高村明とか、あと竹田とか」
聞き手「竹田のことも（在日コリアンであることを）知ってた？」
真田　「それは聞いたなあ、誰かに」
聞き手「高校のときに？」
真田　「高校のときに」
聞き手「へー、誰が言ったの？」

真田　「いやー、誰かなあ？」

聞き手「(竹田)と同じ中学校出身とか？」

真田　「いやー、A中出身(同じ中学校出身者)の奴。だからあの辺はそうじゃっていう(部落だよと教えられた)。あの川沿い」

聞き手「あっ、それを高校の時に教えてもらったんだ？」

真田　「そうそう、あそこは部落なんよって…部落って教えてもらったかもしれんなあ。在日とかじゃなくて。で言われて(そう言われてみると)、そういうバラックみてえな(みたいな)家が多いが(多いじゃない)」

聞き手「で、竹田がそこの部落出身っていうふうに(教わったの)？」

真田　「いや、竹田がそこに住んでるっていうのが後から知ったんか、先に知ったんか、分からんのじゃけど、あー、あいつもあそこ住んどる(住んでいる)なーと思って」

聞き手「ふーん、そっか。で、最初に在日っていうのを個人から聞いたのは、じゃあ、浩？」

真田　「そうじゃなあ。本人から聞いたんはな(聞いたのはね)」

聞き手「それはいつぐらい？」

真田　「高3じゃなあ。3年の中盤(中頃)かな？」

聞き手「中盤？」

真田　「うん」

聞き手「(自動車の)免許取ってから？」

真田　「(自動車の)免許取ったの、夏じゃなあ。原付取ったくらい(4月くらい)かなあ、じゃあ」

聞き手「ふーん。どこで、どこで教えてもらったの？」

真田　「学校かなあ」

聞き手「学校？」

真田　「まあその時はあいつと俺とその2人しかおらんかった(いなかった)けどな。俺、在日じゃけえなあって言ようた(言っていた)。あっ、そうなん(そうなんだ)って感じだった、俺も」

聞き手「その前はなに、家に行ったこととかあったわけでしょ？」

真田　「あるあるある。(浩の)ばあちゃんは訳が分からん歌うたようたん(訳が分からない歌を歌っていたこと)は知っとるけど、それが韓国語だというのは分からんから」

聞き手「あー、ただ単に旧い歌を歌ってるんだって思ったんだ？」

真田　「そうそうそう。ばあちゃんとか韓国語で歌うたよーるじゃろって(歌を歌っているだろうと浩に)言われて、あれそうなんって。で、まあ、その後に、おやじがまあ、ハーフ、じゃなくて2世なんかな」

聞き手「在日じゃな？」

真田　「で、お母さんが日本人じゃっていう、そういう話をきいて。まあ、おかんは家族で勘当で、親戚との縁を切って、親父と一緒になったって。ていう話はきいたけど」

聞き手「彼はみんなには話してたの？仲の良い人たちに？」

真田　「そうじゃろうな、仲良い一部、というか、ごく一部は知っとったと思う」

聞き手「ふーん」

真田　「かといって、みんなが集まっとるところではそういう話はしない。1対1の時だけ、話するみたいなかんじ」

聞き手「ふーん。そっかそっか」

真田　「まあ、でも、そん時だけよ。それ以後はもう話もないし。なんで言うきっかけになったかは知らん。覚えてねえ」

聞き手「…（それ以上の深いこと)は尋ねてねん(ないの）？」

真田　「俺そういうの疎いから気づかんが？だから尋ねることすらねえ」

聞き手「そっか」

聞き手「高校卒業してから会ってねんかなあ(会ってないんだっけ)、ほとんど？」

真田　「会ってねえ」

聞き手「そうか、なるほどね、そうかそうか。他(の在日コリアン)には誰も会ってないよね？」

真田　「会ってねえ」

聞き手「でも、その浩がそう(在日コリアン)だって知って、なんか変わったっていうのはある？」

真田　「まあ、そうじゃなあ、身近に、あーそーなんじゃ（あ、そうなんだ）って思って。ただ、じゃーけーなんなん(だからどうした）っていう気持ち」

聞き手「ふーん。じゃー、例えば水島へ行ったときにはもう知ってたわけ？」

真田　「浩のこと？そりゃあ知っとる。でもそことあいつとは繋がらんよ」

聞き手「あっ、そう？」

真田　「あいつはもう、以前に、それ以前に普通に友達として付き合っとるし。在日って言っても外人とかいう感覚もないし、例えばその時(は)知識がないから、選挙権が無いということも知らんわ。だからもう全然。それと水島

とは別のものみたいな感じなんじゃねんかなあ」

「じゃーけー、なんなんっていう気持ち」によって表現されているのは、真田と高村は友人なのだから違いは無いという感覚である。そして、その友人と在日コリアンはまったく別のものとして想像されている。このような真田の友人に対する思いは、友情という熱意に支えられているとしても、高村の背景にある歴史・社会性への関心は「廃棄」されている。植民地や戦後の在日コリアンに対する差別の歴史なしには、高村の語りさえ存在しないのだという事実から目を背けていることになる。そして、友情という強い肯定の感覚によって、過去の植民地の歴史はどちらでも良いことと考えられてしまう。そのような歴史認識では、「日本人」である彼の発話位置は問われていない。自らの「日本人」の自明性から出発するところから、つまり在日を「他者」ではなくて、まるで工場で生産された商品として消費しようとしているということになる。そこには、日本社会で生活している多数の見知らぬ在日コリアンに対する関心は発生していない。

しかし、在日コリアンをめぐる棄てられた記憶が存在しないわけではないし、在日コリアンについて知ること、あるいは思い出すことに対して関心が無いわけではない。例えば、私と在日について話をして過去の記憶を捉え返したり、私が関わっている多文化共生のイベントへ参加したりした経験についてどのように思うかを尋ねてみたことがある。それに対して真田は次のように応えた。

真田　「そりゃあ、全然楽しいよ。会って、新しいことが知識でつくわけだし。知らない世界がね、よりグレーなところが、霧がとれていく」

5．おわりに――「廃棄」された記憶と向き合う

職場では、潤滑油としての北朝鮮バッシングを共有する従業員たちではあるが、彼／彼女らの北朝鮮バッシングは、その被害者である在日コリアンに対する無知から発生したものではない。彼／彼女らと在日コリアンの関係は希薄と呼べるかもしれないが、日常的に出会っている。本稿では、郊外で生活している比較的若手の従業員7名を事例として取り上げたが、他の従業員もまた在日コリアンとの歴史・社会的繋がりを有していた。それにもかかわらず、在日コリアンに対する差別へと繋がる北朝鮮バッシングが許容されてしまうのは、忙しくてストレスフルな職場において、彼／彼女らが自分たちの帰属感覚の一部を形成している在日コリアンをめぐる記憶を「廃棄」することを選択しているからである。しかしそれはまた、自分たち自身の帰属感覚につい

て語ることを「廃棄」していることでもある。無味乾燥として何かと評判の悪い郊外であるが、本稿でもその一部が明らかになったように、そこには語られることの無い様々な物語が存在しており、実に豊穣な関係性に開かれている場所でもあるのだ。そして、ほとんどの日本人が核家族化し、郊外で生活している現状を踏まえるならば、そこに存在している幾層に重なった複雑な歴史・社会的繋がりについて向き合うことから出発しない限り、自己を語るということが難しくなっている。そして、そのような記憶を「廃棄」することは、北朝鮮バッシングのようなナショナルな言説へと回収されていくことになってしまう。もしくは、終わることの無い「自分探し」の旅へと終始することになるだろう。

日常生活のなかで、私たちが記憶の一部分を「廃棄」する背景には、バウマンが述べるように秩序建設や経済の進歩を目指す政治・社会体制が存在している。自分を語るにあたって社会に適合的な価値ある記憶だけによって形成された自己の帰属感覚とは良い内容ばかり明記された履歴書のようで寂しい。自分について語るということは、ビジネスのプレゼンテーションとは異なるはずだ。

私の調査した山陽コンサルタントは地方の中小企業であり、経営状態も非常に厳しいし、従業員の労働時間も長い。日本の他の地方の中小企業と同様にサービス残業も当たり前のようにある。一年のあいだ職場での経験をともにするなかで、彼／彼女らの現状に対する不安やストレスも強く感じられた。しかし、そのような現状に対する不安やストレスの矛先は、その不安やストレスをつくりだした元凶である現在の新自由主義的な政治・社会体制には向かない。むしろ、職場でのストレスを軽減するためのガス抜きとしてナショナルな物語である北朝鮮バッシングが選択されてしまう。そして、彼／彼女らの背景にある自分たちについて語る資源である記憶は取捨選択され、不必要なものはゴミのように「廃棄」されてしまう。しかし本当に必要なのはどちらなのか。在日コリアンとの記憶をめぐる対話から無味乾燥とした郊外の風景に存在する豊かな繋がりを確認し、郊外住人という「故郷喪失者」である自己を発見するところから、現状の支配的な価値観に支えられた歴史・社会観ではないオルタナティヴが見えてくるのではないだろうか。本稿で試みたように、在日コリアンという「他者」の記憶に焦点を当てることによって、従業員たちの帰属感覚を浮き彫りにすることができる。ここで試みたのはその方法を示すものであって、その記憶をさらに深めていくかどうかの選択は、諸個人に委ねられるものである。そして、記憶を棄てたからといって取り返しがつかないということではない。幸運なことに、産業廃棄物を産業廃棄物処理場に隠すことはできても完全に無くならないように、私たちが棄てた記憶は、まだ私たち自身のなかに埋もれているのだ。つまり、私たちは「廃棄」された記憶に向き合う

ことによって無料で新しい価値観を創出することができる。そこに新たなる物語の出発点があるのではないだろうか。

[注]

[1] 本稿に利用されているデータは、著者がオーストラリア国立大学大学院の博士課程在籍中の2003年１月から12月までの1年間に収集されたものである。故郷で生活する「友人」たちを調査対象者として選択した理由は幾つかあるのだが、本稿の論旨に関連している理由としては、「日常生活における日本人のナショナリズム／差別」という学術的命題に取り組むといった場合、私が具体的に想像したものは抽象的な分類である「日本人」ではなく、私の経験した日常風景のなかで生活する故郷で生活する友人だったからである。そういった意味で、本稿は、日常生活におけるナショナルな現象に向き合うナショナリズムの実証的な研究であるといえると思う。もういっぽうで本稿が試みているのは、オーストラリアという海外で日本研究に関わり「ネイティヴ」として海外の日本研究に情報を提供するものとして、調査方法をすべて開示することにより、欧米の日本研究者とネイティヴ研究者の歪な知的権力構造への批判的な介入である。調査方法は、参与観察によるもので、オフィスにデスクを与えられ雑用係として他の従業員とともに定時に勤務するというかたちをとった。なお、本稿で使用されている会社名・人物名等はすべて仮称である。

[2] 本稿では、アイデンティティではなく帰属感覚という言葉が用いられている。これは、著者の在日コリアンの友人との議論から、アイデンティティという言説が所与としているように感じられる硬直な政治性は諸個人の持つ帰属への感覚や経験の多様性と乖離しているのではないかという疑問を持ったからである。また、かつての共同体概念を前提としたアイデンティティ政治から個人化している現代社会におけるオルタナティヴを模索する意味でもこの言葉を選択した。

[3] フィールド調査は、著者が高校生までを過ごした「ホームタウン」である岡山で高校時代の友人が働く現場で行われた。その友人の父親が経営する従業員17名ばかりの上下水道設計のコンサルタントを行う中小企業である[川端2007：56-60]。

[4] 例えば1970年代に岡山市のベッドタウンとして開発された山陽団地を舞台としたドキュメンタリー作品である本田孝義監督『ニュータウン物語』(2003)には、無味乾燥と捉えられることの多い郊外に存在する地域住民の繋がりが描かれている。

[5] 1936年大阪生まれ。作家・詩人。1950年代後半より、在日朝鮮人の解放闘争に関わりながら、金時鐘らと同人誌『ヂンダレ』『カリオン』を刊行する。29歳の時に事業に失敗し、ばく大な借金を抱えて大阪を出奔、各地を放浪したのち東京でタクシードライバー運転手を10年務める。著書に、詩集『夢魔の彼方へ』『タクシードライバー日誌』、『狂躁曲』、『族譜の果て』、『夜の河を渡れ』、『夜を賭けて』、『闇の想像力』、『雷鳴』、『Ｚ』等がある。

[6] 倉敷市『外国人登録国籍別人員調査表』、2000年によれば、倉敷市に住んでいる在日朝鮮・韓国籍の人口は2606人である。そのうち61%が水島に住んでいる。また、日本国籍取得者や日本人と在日コリアンとのあいだに生まれたダブルの者をいれれば、その数はさらに多いことが予測される。

[7] 同書の在日朝鮮人1世である安采鎬さんの証言にもとづけば、1943年末か44年の初めころから、アメリカ軍の空襲に備えて、三菱重工業水島航空機製作所の疎開工場が亀島山の地下に建設された。しかし、地下工場未完成のまま終戦を迎えた。戦後の時点では7箇所の出入り口があったが、現在では出入りできるのは西側の一箇所だけになっている。通常は鍵がかかっており、一般の人は許可なしには立ち入れないようになっている。

[文献]

崔洛基，1999，『愛国愛族の魂で闘った　倉敷同胞の歩み』在日本朝鮮人総聯合会岡山県倉敷支部.
花房英利，1992，『はじまりはアリランから　民族問題を考える高校生たち』平和文化.
林香里，2005，『「冬ソナ」にハマった私たち——純愛、涙、マスコミ…そして韓国』文芸春秋新社.
川端浩平，2007，「排除型社会における北朝鮮バッシングをめぐるエスノグラフィー——地方都市の中小企業従業員の事例研究」『アジア太平洋レビュー』第4号：49-64.
川端浩平，2008（近刊），「スティグマからの解放、「自由」による拘束——地方都市で生活する在日コリアンの若者の事例研究」『解放社会学研究』第21号.
朴一，2005，『「在日コリアン」ってなんでんねん？』講談社.
若林幹夫，2007，『郊外の社会学——現代を生きる形』筑摩書房.
東浩紀・北田暁大，2007，『東京から考える——格差・郊外・ナショナリズム』NHK出版.
朝鮮人強制連行真相調査団編，2001，『朝鮮人強制連行調査の記録　中国編』柏書房.
中野憲志編，2007，『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の＜平和＞を紡ぐ』新評論.
和田春樹・高崎宗司編，2003，『北朝鮮本をどう読むか？』明石書店.
在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせを許さない若手弁護士の会編，2003，『在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせ実態調査報告書』
Bauman, Zygmunt, 2004, *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts. Cambridge*: Polity.（＝2007, 中島道男訳『廃棄された生——モダニティとその追放者』昭和堂.）
Dower, W. John, 1986, *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*. Pantheon.（＝2001, 猿谷要監修・斎藤元一訳『容赦なき戦争——太平洋戦争における人種差別』平凡社.）
東川町史編集委員会，1986，『東川町史』.
倉敷市，2000，『外国人登録国籍別人員調査表』.
『山陽新聞』2003年8月24日朝刊
『山陽新聞』2003年12月30日朝刊
本田孝義，2003，『ニュータウン物語』
Weir, Peter, 1998，*The Truman Show*, Paramount Studio, USA.